大学生における「あがり」現象について

～自己意識とあがり場面の関係から～

0707048
坂田　麻衣子

【目的】

人前で興奮状態になって赤面してしまったり、自分を見失ってしまう現象は一般に「あがる」といわれている。あがりは多くの人が日常的に遭遇する現象である。

本研究では人がどのような状況で「あがる」のか、あがる状況と個人の性質には関わりがあるのかを自己意識に注目した堤(2006)の研究をもとにしながら調べていくことを目的とする。

【方法】

北海道の某私立大学の学生131名(男子46名、女子84名、未回答1名)を対象に質問紙調査を行なった。

①表紙では基本属性(学年、年齢、性別)、現在・過去の運動部活動の有無、現在・過去のステージ経験機会の有無への回答を求めた。

②Fenigstein らの自己意識尺度を翻訳改訂した計26項目の堤の改訂日本語版に自分に「全く当てはまらない」、「あまり当てはまらない」、「やや当てはまる」、「非常に当てはまる」、の4段階で評価を求めた。

③堤(2006) が作成したあがり傾性尺度の計21項目に「全くあがらない」、「あまりあがらない」、「ややあがる」、「非常にあがる」、の4段階で評価を求めた。

④あがったことによって失敗した経験がどの程度あるかを1（ない）～5（よくある）までの数字で答えさせた。

【結果と考察】

まず自己意識尺度の因子(私的自己意識、対人不安、公的自己意識)があがり傾性因子をどの程度説明できるかを調べるために重回帰分析を行った。その結果、あがり傾性尺度の下位尺度「大聴衆場面」、「1対1場面」、「知人場面」、「能力評価場面」の全てに対人不安の偏回帰がみられ、さらに公的自己意識の偏回帰が「大聴衆場面」、「1対1場面」、「能力評価場面」でみられた。堤(2006) の研究とは結果が異なったところもあったが、有光(1997)など他の研究と比べてみると妥当な結果といえる。

さらに運動部活動の有無、ステージ経験の有無によって自己意識とあがりやすい場面の関わりに変化があるか、条件ごとに一つ目の分析と同様の重回帰分析を行った。結果は過去のステージ経験条件以外で一つ目の分析といくつか結果が異なった。「大聴衆場面」への公的自己意識の偏回帰がみられなかったことから、現在のステージ経験や、運動部の経験により多くの人の前で周りの目を気にしてあがることが少ないと考えられる。

最後にステージ経験・運動部経験、さらに失敗経験のそれぞれによって自己意識尺度・あがり傾性尺度の因子をどの程度説明できるかを調べるために重回帰分析を行った。その結果、失敗経験は私的自己意識と対人不安、全てのあがり傾性因子に有意な回帰がみられた。つまりあがったことによる失敗の経験は様々な場面でのあがりやすさに影響があるといえる。

先行研究同様、本研究でもどの分析においても対人不安が全てのあがり傾性因子に偏回帰がみられため、対人不安がどのような状況のあがりにも作用することがより証明されたといえる。

（指導教員　豊村和真教授）